

平成30年度

いじめ・不登校等対応実践研究のまとめ

平成30年度の「いじめ・不登校等対応実践研究」の指定中学校区において、いじめや不登校等の生徒指導上の諸課題に対応するため、児童生徒に育てたい社会性を明確にし、その育成に向けて取り組んだ実践をまとめたものです。

<実践研究校>

1. 【上越市立春日中学校区】

春日小学校・高志小学校・春日中学校

2. 【上越市立頸城中学校区】

南川小学校・大瀧小学校・明治小学校・頸城中学校

3. 【三条市立大崎学園】

三条市立大崎学園

4. 【南魚沼市立塩沢中学校区】

第一上田小学校・第二上田小学校・栃窪小学校・塩沢小学校
中之島小学校・石打小学校・上関小学校・塩沢中学校

5. 【出雲崎町立出雲崎中学校区】

出雲崎小学校・出雲崎中学校

6. 【村上市立村上第一中学校区】

村上南小学校・瀬波小学校・上海府小学校・村上第一中学校

7. 【佐渡市立両津中学校区】

両津小学校・河崎小学校・両津吉井小学校・加茂小学校
両津中学校

平成30年度 いじめ・不登校等対応実践研究のまとめ

～上越市立春日中学校区の実践～（春日小学校、高志小学校、春日中学校）

1 実践研究のテーマ

- いじめの未然防止に向けた児童生徒の社会性育成、及びいじめ発生時の対応
- 不登校の未然防止に向けた児童生徒の社会性育成、及び不登校解消に向けた取組

2 児童生徒に育てたい社会性

- 自他の立場や役割を理解し、自らを律しつつ、友達と協力・協働することができる。

3 実践内容

(1) 人間関係構築能力の育成

- ① 仲間と協力・協働する活動において、自他のよさの認め合いを大切にした実践の積み重ねと共有化を進める。

(2) 社会的スキルの育成

- ① 「社会的スキル育成プログラム」に基づいた指導を充実する。
- ② S S Eの年間計画の自校化と計画的な実施を進める。(主に小学校)
- ③ 行事とスキル指導の関連を意識した共通実践に努める。
- ④ 共通実践を基にした指導シナリオの集約と改善を図る。

(3) 学校生活の規律・規範意識の定着

- ① 小中学校で共通した「学校生活のスタンダード」に基づいた確実な実践、成果と課題の集約及び見直しを進める。
- ② 保護者、地域住民との連携によるさわやかなあいさつの継続・発展を図る。

4 実践例

(1) いじめ見逃しゼロ強調月間の取組（春日中学校、春日小学校、高志小学校）

(実践内容(2)-①、③、(3)-②)

- ① 「さわやかあいさつ運動」：9月25日(火)～9月28日(金)4日間
春日地域青少年育成会議と共催で、校区内10か所において、小中学生・職員・PTA役員・青少協役員で朝の挨拶運動を行った。えちごトキめき鉄道春日山駅では、通勤・通学する地域の方や高校生と挨拶を交わし、地域の活性化に一役買った。児童生徒は職員や来校者に挨拶する習慣が身に付き、学校内外を問わず日常的に挨拶が交わされている。



- ② いじめ見逃しゼロ標語コンクール：9月～10月

いじめをしない、いじめを見逃さない意識の醸成を図るため、「いじめを見逃さない気持ち」や「温かい人間関係づくり」に関する標語コンクールを青少年育成会議と連携して行った。校区内の全児童生徒が標語を作成し、優秀作品はいじめ見逃しゼロスクール集会時に表彰し、ポスターにして地域に配布した。教室や廊下に掲示してあるポスターを見ながら、いじめを見逃さない意識を高めている。



- ③ いじめ見逃しゼロスクール集会：11月27日(火)

毎年、同一日に集会を開催している。自校のいじめ見逃しゼロに向けた取組を互いに紹介し、中学校区全体でいじめをしない、見逃さない気運を高めている。今年度は、「ネットによるいじめ問題」をテーマとし、正しいネットの使い方やネットいじめの対応について、みんなで考える場とした。児童生徒は自分のネットの使い方を振り返り、いじめにつ



ながる行為がないか再度確認していた。

(2) 春日中学校区小中一貫教育プロジェクト「かかわり部会」の取組（実践内容(1)、(3)-①）

① 「社会的スキル育成プログラム」に基づいた指導の充実

小中学校9年間を通して育成したい社会的スキルを、一貫教育カリキュラムとして作成し、各期に合わせた指導を展開している。

- 例 ・4月あいさつのスキル
 ・5月上旬な聞き方、応え方のスキル
 ・11月あたたかいメッセージを伝え合う

② 「学校生活のスタンダード」による確実な共通実践

小中学校9年間に共通する基本的なルールやマナーを、学校生活の一日としてまとめ、共通実践している。これにより校種を問わず指導の一貫性が保たれている。どの職員も同じ基準で指導に当たることができ、児童生徒も困惑せずに落ち着いて活動することができている。

- 例 ・集会では、静かに集合・整列し、静かに話を聞きます。
 ・給食当番は身支度をして準備し、当番以外の人は座って静かに待ちます。
 ・無駄話をせず、清掃用具を正しく使って、時間いっぱい掃除をします。

(3) 「温かいメッセージ」でよりよい人間関係を築く取組（春日小学校）（実践内容(2)-①~④）

春日小学校では、児童の人間関係調整能力を高める一つの手法として、ソーシャルスキル教育(Social Skills Educationを略して以後SSE)を取り入れてきた。教師による「悪いモデリング」と「よいモデリング」をもとに、望ましい言動(温かいメッセージ)について考える。児童がやってみて、活動を振り返るという学習過程を取っている。全校で指導の方向性をそろえることで、一貫した指導を行ってきた。

全校でSSEを実施する際の重要なポイントは3つである。

- ① 学校生活との関連を図ること。生活目標や学校行事、学習内容などと関連させて身に付けさせたいスキルを設定する。
 ② 児童の発達段階に応じたねらいにすること。発達段階に応じて、6年間を見通した指導計画(A・B年度方式)を立て、継続的に学ぶ。
 ③ 具体的なスキルを提示すること。日常生活で起こりうる事例を想定したシナリオを作り、友達とかかわる際に活用できるように、推進部や学年で内容について検討する。

【春日小年間指導計画】

時期	生活目標	主なねらい	具体的なスキル
5月	相手の話を上手に聞いて気持ちよくこたえよう	【全校SSE(体育館)】 ・人の話を聞くことの大切さを理解する。 ・上手な話の聞き方を身に付ける。	・していることを止める。 ・相手を見る ・相づちをうつ
6月	温かいメッセージを伝え合おう	【学年部または学年SSE】 ・伝える言葉が及ぼす影響を理解する。 ・温かい言葉かけの伝え方を身に付ける。	・気づかう ・感謝する
10月	相手の目を見てあいさつしよう	【全校SSE(教室情報ボード視聴)】 ・かけはし班活動(子ども祭り)と関連を図ったSSEを実施する。	・気づかう ・感謝する ・ほめる ・励ます ・応答等
11月	友達と声をかけ合い仲良くしよう	【学年部または学年SSE】 ・いじめ見逃しゼロ強調月間と関連を図ったSSEを実施する。	・ほめる ・頼む ・励ます ・トラブルの解決策を考える →小6・中1が実施
2月	友達を大切にしよう	【学年SSE】 ・いろいろな言い方のモデリングを提示し、よりよい伝え方を考える。	・誘い方、入り方、頼み方、断り方 ・リーダーシップ フォロワーシップ

10年以上の継続した取組であり、児童や職員には、SSEへの意識や心構えが定着している。昨年度からは、いじめ見逃しゼロスクール集会を行う11月に、小中共通(小6・中1)して、「トラブルが起きたときの解決策を知ろう」の内容でのSSEも始めた。このような取組が、学校単位でなく、中学校区全体の温かな人間関係の構築と社会性育成の向上につながると考えている。



鼻血が出た友達にどんな言葉(気づかう)を掛けるか考える1年生

5年生「林間学校」との関連を図ったSSEでの教師のモデリング



(4) 特別活動の中核とした社会性育成の取組（春日中学校）（実践内容(1)、(2)-③、(3)-①） くねらい>

心の安定が得られ、所属感があり、互いに認め合える集団づくりを目指す。（自分は学級の一員である。学級は安心できる空間である。みんなは自分の良さを認めてくれる。自分は集団に貢献できている。など）

ア 所属する集団を自分たちの力によって円滑に運営する経験を積み重ねる。

イ 行事の成功に向けた取組を通して、集団としての連帯意識を高め、集団（社会）の一員としての望ましい態度や行動の在り方を学ぶ。

ウ 集団生活の中でより良い人間関係を築き、それぞれが個性や自己の能力を活かし、互いの人格を尊重し合って生きることの大切さを学ぶ。

<基本方針と取組>

① 各行事を核とした「がんばる期」を設定し、その行事に向けて日常生活を向上する取組を充実させることで、学級の仲間、学年を越えた仲間との恒常的な協力関係を築く。

- ・第1期スプリングトライアルデー（春の遠足）
- ・第2期部活動（各種大会）
- ・第3期体育祭
- ・第4期合唱祭
- ・第5期いじめ見逃しゼロスクール集会
- ・第6期卒業式（進級）

② 多様な場面（授業、学級活動、学年活動、委員会活動、部活動、行事等）で、ファシリテーショングラフィックやホワイトボードミーティングを活用した「学び合い」を仕組む。

- ・授業の中で「学び合い」の機会を多く取り入れ、他者の考えを学び、互いの良さを認め合う授業を推進する。
- ・各行事の前に「目指す姿」「身に付けたい力」を明確にし、思いを共有する。そのために何をすべきかを話し合い、実践する。

③ 学級づくりメソッド（係、日直、給食、清掃、朝・終学活など）のねらいや方法を共通理解し、全学級で共通実践する。

- ・自己の役割を果たし、集団に貢献する経験を通して、自己肯定感、自己有用感を高める。
- ・全学級で揃える活動をすることで、望ましい価値観が共有され、規範意識を高めることができる。

④ 日常の活動（生活向上運動）は級長会が中心となっており、学年行事はそれぞれ実行委員会を組織して企画・運営する。

- ・多くの生徒が様々なリーダーを経験できるようにする。時にはリーダーとして前に立ち、時にはフォロワーとしてリーダーを支える立場を相互に経験する。
- ・生活向上運動を通して、リーダーとフォロワーが一体となって規範意識の高い生徒集団をつくる。
- ・生徒の創意工夫を生かした活動（生徒が企画・運営・評価する）を仕組み、生徒が前面に出て活躍する場を多く設定する。



5 成果と課題

<成果>

- 「15の春をどう迎えるか」を合言葉に、9年間を見通した小中連携の取組は、落ち着いた学校生活をつくり出す要因となっている。上級生が手本となり、正しい姿を見せることで、下級生が望ましい姿を目指す「あこがれサイクル」を生み出している。
- 児童は、1年生からSSEを経験し、温かい言葉掛けによって気持ちよく活動できることを知り、自らも発信できるようになってきている。全校SSEと学級、異年齢集団の活動がかみ合い、親和的な集団の形成につながっている。
- 時折、思慮に欠けたいじめにつながる言動が見られるが、職員が早期に発見し、毅然とした対応ができています。それが児童生徒にも伝わり、いじめを見逃さない雰囲気をつくり出している。
- 不登校生徒はどの学年にもいるが、生徒・保護者と職員とのつながりを保ち、粘り強く対応している。中には、校内適応指導教室へ復帰し、その後教室登校へ復帰した生徒もいる。

□学校評価アンケート 春日小学校（2学期末実施 総数 731名） (%)

	評価項目	A	B	C	D
1	授業がよくわかる	66.3	29.3	4.4	0.0
	授業が楽しい	61.7	30.8	6.0	1.5
2	学校に来るのは楽しい	65.1	26.7	7.1	1.1
	あなたやあなたの周りで、いじめや暴力はない	68.3	22.3	7.8	1.6
3	友だちと話し合ったり、一緒に考えたりする学習は楽しい	77.4	18.9	3.4	0.3
	友だちとの話し合いで、自分の考えが確かになったり、深まったりした	60.6	32.6	5.6	1.2
4	当番（給食、掃除）や係の仕事をきちんとやっている	80.8	16.8	2.1	0.3
5	よりよい集団（学校・学級など）にするために、何ができるかを考えて、みんなのために活動している	54.2	36.9	8.2	0.7

□学校評価アンケート 春日中学校（2学期末実施 総数 507名） (%)

	評価項目	A	B	C	D
1	授業で「分かった」「できた」という喜びを感じる事が多かった	45.0	45.6	7.3	2.2
2	私の周りではいじめなどがなく、楽しい学校生活をつくる努力をすることができた	65.3	28.4	5.7	0.6
3	学び合い（FGやホワイトボードミーティングなど）に積極的に取り組むことができた	65.5	27.4	6.7	0.4
4	学級の係や当番活動、委員会活動、部活動を創意工夫して行うことができた。	72.0	24.5	2.8	0.8
5	自分の役割を果たし、集団に貢献する喜びを感じる事ができた	57.0	33.9	7.5	1.6

Aとてもよく当てはまる Bどちらかといえば当てはまる Cどちらかといえば当てはまらない Dまったく当てはまらない

<課題>

- 学校が落ち着いた状況にあるにもかかわらず、様々な理由から不適応傾向を示す生徒が年々増え、それが不登校へとつながっている。個別の原因と対策を考えていく必要がある。
- ネット依存による生活習慣の乱れや、人と人との心のつながりの希薄さが心配である。今後もネット上の正しい使い方やトラブルの未然防止・解決に関する生徒への指導や保護者への啓発を継続する必要がある。
- 小学校間の連携を一層進め、身近に起こりうる事例を取り上げたシナリオをもとにしたSSEの継続的な取組が望まれる。切れ目のない一貫した取組は、中学校区全体の温かな人間関係の構築と社会性の向上につながる一つの手立てと考える。

平成30年度 いじめ・不登校等対応実践研究のまとめ

～上越市立頸城中学校区の実践～（頸城中学校、南川小学校、大養小学校、明治小学校）

1 実践研究のテーマ

- いじめの未然防止に向けた児童生徒の社会性育成、及びいじめ発生時の対応
- 不登校の未然防止に向けた児童生徒の社会性育成、及び不登校解消に向けた取組

2 児童生徒に育てたい社会性

- 目標をもち、計画を立て、進んで諸活動に取り組む。（自己有用感・所属感・達成感）
- きまりを守り、場に応じた言葉遣いや行動ができる。（規範意識）
- 「聞く、気づく、理解する、伝える」ことを大切にする。（論理的コミュニケーション能力）
- 一人一人の個性を理解し、だれとでも協力できる。（自己理解・他者理解）

3 実践内容

- 小中9年間を通し、段階に応じた「身に付けたい資質・能力」を育成
- ボランティア活動、異年齢交流会、体験活動等を通じた社会性の育成
- 計画的・継続的な人権教育、同和教育、情報モラル教育等の実施
- 所属感を高める学年・学級経営の工夫
- アンケートや教育相談を通じた児童生徒と教師の信頼関係構築
- 家庭と連携した生活習慣改善の取組推進

4 実践例

(1) 小中学校連絡会「生徒指導部会」を中核とした共通理解・共通実践（小・中学校）

小中学校連絡会は、9つの部会（校長部会、教頭部会、教務部会、学力向上部会、国語部会、生徒指導部会、養護教諭・生活改善部会、特別支援教育部会、人権教育・同和教育・道徳部会）で成り立っており、相互に連携して、より充実した教育活動を実施・展開する趣旨で開催されている。

生徒指導部会では、『目指す生徒像』を掲げ、段階に応じた育成を心がけている。年間6回の部会は、会場を各校輪番とし、授業参観を含めた部会としている。児童生徒の様子を観察したり、情報交換したりするだけでなく、中学校区の課題をあげ、規範意識や場に応じた言動が育つように共通認識を心がけている。また、行事での小中交流、学校説明会、体験入学、小6交流会等を通して、中1ギャップ解消を図るとともに、児童生徒へのはたらきかけのベクトル合わせができるようにしている。

(2) 保護者と連携した生活習慣改善「生活コントロールチャレンジ週間」（小・中学校）

メディア依存は中学校区の大きな課題の一つである。年間3回の中学校区共通の「生活コントロールチャレンジ週間」では、児童生徒が保護者と相談し、選択肢の中から目標を決定し、自分をコントロールしながら取り組んでいる。学校評価の「メディア時間を1日2時間以内にすることができたか」という問いに対して、「はっきりハイ」または「だいたいハイ」と肯定的に答えた生徒が、4割程度しかいなかった。望ましい生活習慣を実践しようと保護者の意欲も向上している。しかし、自我が目覚める時期である小学4～6年生は、自分の気持ちを抑えることができない傾向があり、そのことが中学生になっても継続されている様子が伺える。生活習慣の改善が自律した個を育成する一助となるよう継続指導していきたい。

(3) 「小学校訪問あいさつ運動」（小・中学校）

コミュニケーション能力育成の方策の一つとして「あいさつの推進」が挙げられる。中学生が『あいさつキャンペーン隊』を組織し、卒業した小学校を訪問して、児童の見本となるような朝のあいさつをすることで、児童・生徒にあいさつへの意識を高める契機とした。参加生徒は生活委員・応援委員・総務委員とし、有志生徒の参加も可能とした。あいさつ推進ののぼり旗を活用し、雰囲気盛り上げた。昨年度は、5月のみだったが、今年度は、5月と10月の2回、のべ6日間の実施とした。10月のキャンペーンでは、中学生のはたらきかけもより活発になり、元気なあいさつが児童からも返ってくるようになった。



(4) いじめ見逃しゼロスクール集会（小・中学校）

いじめや暴力を見逃さない学校を目指すことはもちろんのこと、いじめを未然に防止するために自己有用感を育てること。自分自身や学級・学年の現状を分析して振り返らせ、改善や向上を図る機会とすること。小学校間及び小中学校間の垣根を越えた児童・生徒間の面識を深め、中学校進学への不安を軽減する一助とすることが目的である。

小中合同で実施する集会が4年目となり、いじめを考える第1部では、事例の提示に対して、自分ならどう行動するかを色のついた紙で意思表示する活動を行った。交流活動の第2部では、児童と中学1年生がアイスブレイキングやグループで回答するクイズなどに挑戦した。児童生徒は積極的なコミュニケーションを心がけ、互いに理解しようとする姿が見られている。今後も内容の吟味をしながら、継続していく予定である。

自分の意思をカードの色で示す様子



小中の交流活動、アイスブレイキングや班対抗クイズ



(5) 全校SSE（小学校）

全校SSEを学期1回行い、ソーシャルスキルを学ぶ意義を確認するとともに、モデリングを見たり、リハーサルを行ったりすることで、仲間との人間関係づくりについて学び、規範意識の育成を行った。

1学期は、「ルールを守るとみんなが気持ちいい」をテーマに「時間を守る」等の内容から、自己判断力と周りの人の気持ちを考え行動できる力を身に付ける学習を行った。

2・3学期は、「ていねいな言葉づかいをするとみんなが気持ちいい」をテーマに正しい言葉遣いを意識することで、自分も相手も気持ちよくなることに気付く学習を行った。

全校で同じ学習をしたことで、児童も教師も共通意識をもち、普段の生活において同一歩調で活用したり指導できたりしている。



(6) ふれあいウォークラリー（小学校）

異学年の縦割り班によるウォークラリーを通し「いじめをしない・させない」人間関係をつくることを目的とした。

9月に年間を通してかかわりをもつ、縦割り班でウォークラリーを実施した。校区内のポイ

ントを班ごとに回り、指令書に従ってゲーム（フライングボール・積み木積み上げ競争・フラフープくぐり等）をしたり、クイズを解いたりして得点を競った。

6年生を中心に高学年が、低学年児童のリュックを持ってあげたり、体調を気遣いながら歩いたりし、励ましの言葉を掛ける姿が多く見られた。各学年にかかわるクイズが出題されたポイントでは、「〇〇ちゃん、すごいね。」「〇〇くんのおかげでクリアできたよ。」と、仲間を称賛する言葉も聞かれた。

学年に応じてリーダーとフォロワーの立場を意識して仲良く活動することができた。



(7) 社会性を育むための「絆イベント」(中学校)

5月の「仲間づくり遠足」は、仲間との協力性を高め、集団としての団結力を高めることがねらいであり、その後実施する「体育祭」「音楽祭」、「いじめ見逃しゼロスクール集会」等の学校行事と連動している。この一連の取組を当校では「絆イベント」と称している。いずれもグループ活動での協力性や異学年交流の深まりを期待している。また、いじめを許さない・いじめを見逃さない態度、きまりを守る姿勢、リーダーとフォロワーの好ましい関係を醸成し、自分の役割を果たす力などを向上させていきたいと考えている。

計画的・継続的な各種教育の実施、また、校外学習や体験活動等を通して、振り返り用紙で自分自身を振り返ったり、仲間とのメッセージ交換をしたりすることで、達成感やコミュニケーションの楽しさなどを感じている。特に、行事相互の関連を図りながら実施される「絆イベント」に対する取組姿勢の面では、模範となる言動が多く見られるようになってきているなど、生徒同士の信頼関係は育っている。毎月末の生活アンケートの記述についても良好で、素直な気持ちをしっかりと記述する生徒がほとんどであり、教師との信頼関係も構築されている。

仲間づくり遠足、炊飯活動



仲間づくり遠足、男女混合班で目的地へ



体育祭



音楽祭



(8) 「頸城の祭典」への参加（地域）

8月5日（日）に行われた「頸城の祭典」（頸城区主催）において、児童生徒が積極的に様々なイベントに参加し、地域の一員として活躍した。生徒会総務が中心となって、事務局の方々の傍らで進行や抽選の補助を行ったり、頸城中ブースで西日本豪雨の被災者のために募金をしていただいた方々に綿あめを配ったりした。また、頸城区の活性化に向けた観光パンフレット作成のための、頸城区観光地アンケートへの協力を呼び掛けた。

昨年度と同様に、体育祭で行った「よさこい」を「頸城の祭典」でも有志60名が披露した。その他にも、吹奏楽部の演奏や地域クラブ所属生徒のダンス発表など、日頃の練習の成果を披露した。

地域の行事を盛り上げるために積極的に自分の役割を果たし、地域の人々とつながろうと児童生徒が努力する思いは地域の人々にも伝わり、地域の方々も児童生徒の発表を楽しみにするようになった。自分たちの演奏や演技を温かい拍手とともに受け止めてもらったり、行事での仕事ぶりを認めてもらったりすることにより児童生徒の自己有用感が高まっていった。

有志による、小中学生合同のよさこい発表



地域クラブ所属生徒のダンス発表



吹奏楽部の演奏発表



抽選テントの補助役員



5 成果と課題

年度当初、見込まれる成果として、次の3点をあげた。

- 育てたい社会性向上によるいじめ・不登校・問題行動の減少
- 生徒と教師が一体となって、より良い学校づくりを目指す体制の強化
(生徒同士や生徒と教師の信頼関係の構築)

- 家庭や地域と連携して教育活動が展開される体制の強化

また、成果を検証する方法・手立てとして、学校評価（生徒・保護者・職員）、いじめ見逃しゼロアンケート、QU、学期の振り返り等から生徒の心の変容を見取ることとした。

人間関係形成能力や規範意識の不足、それを起因とした問題行動は、依然としてあるが、暴力行為は減少（H28:12件、H29:11件、H30:4件）＜H30の数値は1月末現在＞している。社会性の欠如を起因とする学習・集団不適応生徒がやや増加傾向（H28:1名、H29:5名、H30:6名）にある。いじめの認知件数については、見取りを強化している影響もあり、増加（H28:0名、H29:3名、H30:6名）している。今後もいじめの早期発見・早期解消に努めていきたい。（数値は中学校の学校評価より）

生徒の学校評価で、「学力づくり」「絆づくり」に関する項目は、概ね良好で、学習への取組や

規範意識、集団づくりの数値は高い。メディア時間が多い状況だけが課題である。毎月末の生活アンケートの記述も良好で、振り返りの内容が大変前向きである。生徒と教師の信頼関係が構築されているとも言える。

小学校における学校評価では、「学校にいじめや暴力がない」に対して、約4割の児童が「否定的な回答」(H30年12月)をしている。数値は、児童一人一人が仲間とのトラブルを軽微なこととして捉えず、「いじめを見逃さない」心が育ってきていることも表している。また、「仲間と協力して活動している」に関する3項目では、それぞれ95%に近い数値が示され、昨年度より高い数値となっている。

しかし、言葉遣いが乱暴であったり、自己中心的な言動をしたりするために起きるもめごともある。今後も、お互いが認め合うことを通して自己有用感を高め、人間関係づくりの能力を高めていかなければならない。

保護者も協力的で、規範意識の向上やいじめを許さない意識は、高い数値を示している。『生活コントロールチャレンジ週間』での連携でも保護者の協力体制は良好であることから、メディア時間改善の取組は今後も継続していきたい。「頸城の祭典」をはじめ、地域のボランティア活動など、地域を学習活動の場とするための連携体制は整ってきているので、今後も内容を工夫して継続していきたい。

平成 30 年度 いじめ・不登校等対応実践研究のまとめ

～三条市立大崎学園の実践～

1 実践研究のテーマ

- いじめの未然防止に向けた児童生徒の社会性育成、及びいじめ発生時の対応
- 不登校の未然防止に向けた児童生徒の社会性育成、及び不登校解消に向けた取組

2 児童生徒に育てたい社会性

- 規範意識（ルールや約束、善悪の判断）
- 人間関係づくりの能力（相手への理解、自分を表現する力）
- 自己有用感（交流体験を通じた自分の存在価値）
- 困難に対して他と協力しながら問題解決を図る意欲や態度（協働）

3 実践内容

- 児童生徒の社会性育成の取組（社会性育成プログラム作成と実施）
 - ア 行事（総合的な学習の時間）、道徳・学級活動・各教科、双華会活動・部活動、生徒指導が連動した教育活動の推進
 - イ 児童生徒が主体となる学級・学園づくり
 - ウ 地域との交流活動やボランティア活動の推進

4 実践例

(1) 大崎学園体育祭

今年度の体育祭は、義務教育学校として初めて行うものであったことから、発達段階を考慮して1～9年生合同で実施した。活動のねらいとして、①企画・運営・実践をとおして、自主性や責任感を身に付け、目標をもって物事に取り組む態度を身に付けること、②協力・競争する中で、規律を重んじ、互いに高め合う集団になること、③学級の団結を高めるとともに、大崎学園の絆を深めることの3つを柱とした。活動の中で、6年生と9年生（後期課程の中学3年生）のそれぞれのリーダーをどのように生かすのか、お互いの発達段階に応じて対応することに、計画段階から前期後期職員や児童生徒が試行錯誤して形を作り上げてきた。前期後期のリーダーが、互いに集団のまとめ方を学び合い、良さを認めてたたえ合う姿は、他校では見ることのできない貴重な場面であった。しかし、初めての9学年での開催ということで、目指す姿のイメージの統一ができなかった。次年度は、前期後期それぞれの目的やねらいの違いを発達段階に応じて整えていく必要がある。

(2) 大崎学園前期後期合同挨拶運動

昨年度までは、小中学校をお互い行き来し合ったり、地域に出て行ったりして挨拶運動を行っていた。人間関係づくりの第一歩は挨拶と考え、学園の校門から玄関入り口につながるアプローチで、前期児童と後期生徒が分け隔てなく挨拶を交わし合える姿を願い、前期後期の生活委員会の児童生徒が交互に並び挨拶運動を行った。また、10月には楽しく笑顔で挨拶できる工夫として、パペットや仮装用具を使って笑顔で1日が始められる工夫をした。初めは恥ずかし

くて遠慮がちだった後期課程の生徒も喜んで笑顔で参加している姿が見られ、普段よりも明るい朝のスタートを切ることができた。

(3) 大崎学園文化祭に向けて（造形活動「大崎アート」）

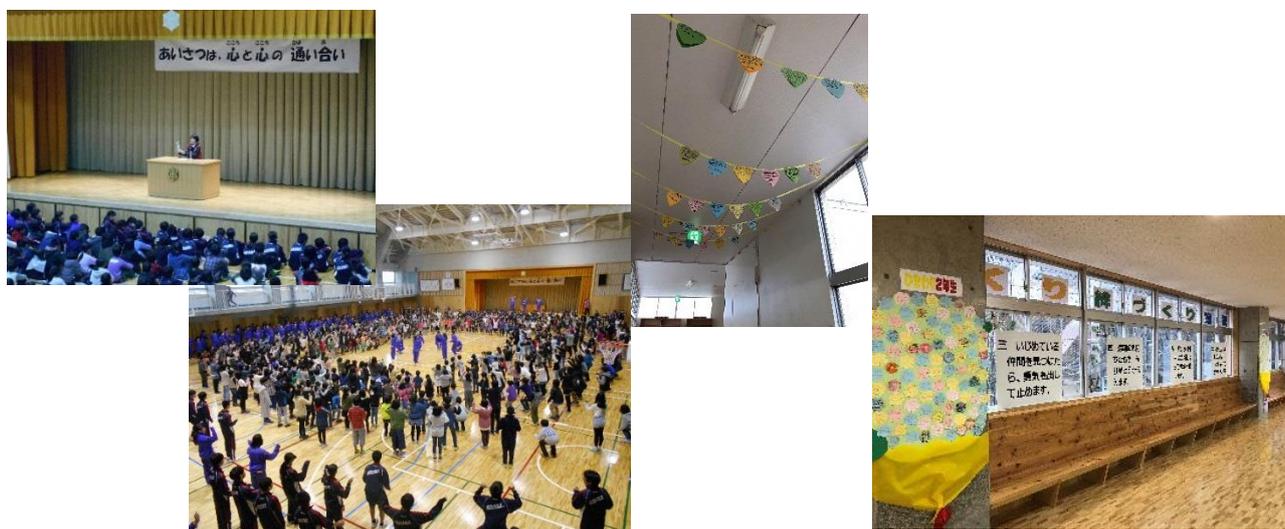
義務教育学校初の文化祭のメイン作品として、全校で造形活動の「大崎アート」に取り組んだ。全校児童生徒一人一人が、割り箸と輪ゴムを使ったピース作りをし、それを全校分積み重ねることで1つのアート作品に仕上げた。ピース作りの時には、後期の生徒が、どう説明したら前期の下学年児童にわかりやすいかを考えながら、それを前期の上学年児童がサポートしながら制作するという交流活動を行った。その中で、下級生を思いやる気持ちが育ち、難しいことでも仲間と協働して作業をすれば、大きなことを成し遂げることができるという達成感を得ることができた。



(4) 大崎夢づくり絆づくり集会（全校ダンス・絆宣言）

9月の体育祭の応援合戦では、練習時間の調整が難しいことから、ほぼ前期後期別々の応援内容となった。しかし、事後の振り返りでは、後期生徒のパフォーマンスが楽しそうだったから一緒にやってみたかったという児童の言葉が多くあった。そこで、今年度の夢づくり絆づくり集会のメイン活動として、体育祭で後期の各軍のパフォーマンスで踊ったダンスを3軍メドレーにして踊ることを計画した。この集会の事前事後には学校全体で「夢づくり絆づくりウィーク」を設けた。全校が一体感を味わい、所属感や連帯感を意識することで、「いじめ見逃しゼロ」に向かう集団の風土づくりをねらい、人権に関わる道徳授業や学年の取組を行っている。

この集会でのメイン活動であるダンスの振り付けを教える活動を通して、後期生徒の自己有用感が高められ、前期児童の所属意識や連帯感も高まった。また、活動後には全校で絆づくりに関するメッセージカードを書き、学年で1つの花束にして玄関前に9つ並べて飾った。



(5) なかよしチャレンジ（前期課程縦割り班活動）

前期双華会（児童会）が中心となって進めた取組である。大崎小学校で行っていた縦割り班での遠足ができなくなったため、2学期の児童朝会で継続的な集会活動に取り組んだ。具体的には、①縦割り班（なかよし班）のメンバーで用具（新聞紙の輪）を作る、②その用具を使ったゲームの練習をする、③全校で楽しみながら競い合うというイベントである。異学年との交流を重ねることで相手を思いやる気持ちを持ち、親和的な人間関係を築く力を育てることをねらいとした。班の仲間と仲良くなり、なかよし班の活動を楽しみにする児童が増え、活動の中でそれぞれの自分の役割を考えて協力して取り組むことができた。

(6) 地域との連携

（PTCA ボランティア・文化祭 PTCA 合唱・文化祭コミュニティの部屋・

どんぐりころころ祭り・小中一貫リレー・大崎ミュージックフェスティバル等）

当学区には、大崎コミュニティ（愛称どんぐりころころ）という地域コミュニティ組織がある。十数年前に PTA 役員歴任者や自治会長、学校職員等が大崎地区の児童生徒の健全育成のために立ち上がり、地域や学校の清掃から活動を始めたそうである。地域の方が学校へ出向き、一緒に新しいまちづくりについて考える授業をしたこともある。今では5つの部会（防犯・健康づくり・環境美化・青少年育成・体力づくり）に分かれて地域貢献活動を行っている。

PTCA ボランティアは、昨年度まで大崎中学校 PTA とこの大崎地域コミュニティ（C）が共に協力して行ってきた活動である。春と秋の年2回行われ、生徒・保護者・地域住民が、一緒に汗を流しながら、校庭のプランターや地域の花壇、公民館のプランターに花を飾ってきた。今年度からは、このボランティア活動に小学校1～6年生（前期課程の児童）も加わり、今までより参加者の年齢層が広がって賑やかな PTA 活動となった。親子と地域とで協働し、住みよい地域環境づくりに貢献することで、参加児童生徒はこの大崎地域への所属感を高めることができ、小さな力でも「自分は役に立つ」ということを体感することができた。

また、文化祭では、PTA 活動として、地域の愛好者も参加できる「PTCA 合唱」の取組（大崎学園 PTA 文化部主催）や大崎コミュニティ主催の「コミュニティの部屋（お楽しみコーナー）」の開設が引き続き行われており、地域の方との交流の場を楽しんでいる。

他の大崎コミュニティ主催の活動の中で児童生徒が関わる場面としては、地域に住む東日本大震災の被災者を勇気づけるために始めた「どんぐりころころ祭り」での生徒ボランティア、自治会対抗の大会である「体育レクリエーション大会」での「小中一貫リレー」、「大崎ミュージックフェスティバル」での吹奏楽部の演奏等があり、地域と学校との具体的な結びつきとなって続いている。





文化祭コミュニティの部屋 (スライム・寄せ植え)



文化祭 PTCA 合唱

5 成果と課題

○規範意識 (ルールや約束、善悪の判断)

- ・ 体育祭の活動の中で、後期課程では応援準備活動時のルールを自分たちで作り、評価を行っていた。具体的には、活動時間を守る、活動に適した服装をする、後片付けをきちんと行う等である。このように自治的に自分たちの行動を相互に評価している後期生徒は、ルールや約束を守り、正々堂々と活動することの良さを学んだ。一方、どちらかという教師主導でリーダーを育成しながら活動を進めていく前期課程では、ルールの徹底の仕方にも違いがあるが、高学年の児童は、後期課程生徒の活動の様子を間近に見ることで、自分たちで考えて行動するイメージをもつことができた。
- ・ 普段の日常生活の場面でも、児童生徒の発達段階に大きな差があるため、その発達段階の差を考慮して規則を適切に設けている。それを基本としつつ、一律に指導できないことでも、大事なポイントは全校で歩調をそろえていかなければならないことに難しさを感じており、当義務教育学校にとっては、今後の重要な課題である。

○人間関係づくりの能力 (相手への理解、自分を表現する力)

- ・ 後期課程の挨拶の良さに感化され、校舎内では前期課程でも明るい「こんにちは」の挨拶が自然と飛び交うようになった。このことは、児童生徒から最も多く「学園になってよかったこと」として挙げられていた。
- ・ 不登校児童は少ないが、8・9年生の不登校生徒は多くいる。しかし、7年生 (中学校1年生) は、長期欠席者がおらず、中1ギャップはほとんど見られない。これは、小学校時代と同じ校舎で変化が少なく進級したことや、ここまでに述べた様々な取組の中で、自分のことをよく知る仲間や職員から継続的に見守られているという生徒の安心感が、順調に学校生活を送ることにつながったと考えられる。
- ・ 学校生活の基盤は学級、学年である。「夢づくり絆づくりウィーク」での仲間づくりに関わる活動を組織的に仕組んだことで、9年間同じメンバーで過ごす仲間の中で自分の気持ちを開放できるようになってきた。今後も日頃から幅広い異学年の仲間と仲良く協力して過ごせるといふ学園の風土づくりをさらに進めていく。

○自己有用感 (交流体験を通じた自分の存在価値)

- ・ 9学年でいっしょに行った体育祭や文化祭での大崎アート、夢づくり絆づくり集会での全校ダンスを通して、特に上級生は認められ頼られる場面が増え、自分を表現する力もついてきた。思いやりや助け合いの気持ちも高められた。また、下級生も先輩達の様子を見ながら、自分にできることを考えて行動できる児童が増えた。
- ・ 開校初年度は、学年や学級単位での積極的な交流活動はあまりできなかった。今後、日頃の教育活動の中でも、ペア学年や縦割り学級を組織するなどして義務教育学校ならではの特色を生かした取組を工夫していきたい。

平成 30 年度 いじめ・不登校等対応実践研究のまとめ

～南魚沼市立塩沢中学校区の実践～

(第一上田小学校・第二上田小学校・栃窪小学校・塩沢小学校

中之島小学校・石打小学校・上関小学校・塩沢中学校)

1 実践研究のテーマ

- 不登校児童生徒の減少と未然防止に向けた社会性の育成
- 他者との関わり合いを高めるための社会性の育成

2 児童生徒に育てたい社会性

- 自分に自信をもって、主体的に日々の生活を送ろうとする態度を育成する。
- 他者と積極的に関わろうとする意欲や態度を育成する。

3 実践内容

- (1) 小・中 9 年間をとおして社会性を育むために、中学校区の学校間連携を整備、強化する。
小中合同による取組や活動、職員研修等を具体的に進めるために、校区の生徒指導部会を有効な機会とする。
- (2) 生徒会活動、児童会活動の視点として他者との関わりを重視し、多様な人々と関わる体験活動をとおして、児童生徒の社会性を育む。

4 実践例

塩沢中学校区において、小学校では「さ(さわやか挨拶) わ(忘れ物ゼロ) や(やさしい言葉) か(家庭学習) しおざわっ子」、中学校では「あ(挨拶) じ(時間) み(身だしなみ) こ(言葉遣い)」を合言葉に日々の活動に取り組んでいる。そして、小学校と中学校との交流をより一層充実させることで、児童生徒のより良い人間関係を構築することで更なる社会性の伸長を目指し、以下の活動に取り組んだ。

- (1) 小学校中学校間の交流 ～児童生徒が互いを高める人間関係、社会性の伸長を目指して～

① 中学校区「深めよう絆集会」(塩沢中学校体験入学)

この活動を年間 2 回に増やして 2 年目になる。7 月は中学校での中学生の授業を見学することと小学校 7 校の 6 年生同士の交流活動、10 月には、生徒会役員生徒が中心となって今年度新たに取り組んだ中学校紹介や 6 年生からの質問に回答する創作劇、6 年生と中学 1 年生による交流活動、そして、部活動体験を行った。「小学生からの質問に対する回答創作劇」では、「学習に関すること」「部活動に関すること」「学校行事に関すること」「人間関係に関すること」などの質問が多く寄せられ、中学生は自分たちの経験をもとにして小学生の気持ちを推し量りながら、丁寧な計画を立てて当日の実践につなげた。当日は、中学生が先生役と児童役とに分かれ、先生役の生徒が質問に答える形式で会を進めた。部活動体験では、2 年生の部長を中心に、1、2 年生が小学生に対して丁寧に分かりやすい言葉を選びながら接している場面が多くあった。小学生は、7 月の 6 年生同士の交流活動において、よりお互いの関係が深まるように、児童同士がより関わり合いのもてる内容を企画した。当日は前向きに他校の児童と関わり合おう

とする姿が多く見られた。また、中学生は、10月の活動に向けて話し合い活動を何度も重ね、活発な議論を行った。お互いの意見を取り入れたり、更に内容を精選したりするなどの姿が多く見られた。



生徒会総務による学校紹介



小学生の質問に対する回答創作劇



部活動体験

② 塩沢中学校区あいさつ運動

11月、生徒会役員や委員長がそれぞれ担当を決め、分担して7校の小学校に出向くという形で小中学校合同のあいさつ運動を実施した。2年目を迎える今年度は、昨年度の経験を踏まえながら、より深化を目指して取り組んだ。昨年度と同様に事前のPRの方法を参加生徒で相談し、PR動画に加えて今年度はポスターを作成し、7校の小学校に配付し、更なる充実を図った。また、小学生への接し方、中学生の取るべき姿など、小中合同あいさつ運動の高まりを目指して話し合いを行った。「どうすれば、小学生に受け入れてもらいやすいか」ということを柱に「丁寧な言葉掛け」「しゃがむなどして目線を合わせる」等の意見が出ていた。



あいさつ運動の様子

③ 中学校区での取組の成果

〈小学校・中学校の交流に関して〉

他校の小学生同士のレクリエーションは、小学生が抱いている「他校の児童とうまく関わることができるか」という不安の軽減につながった。また、中学1年生と小学6年生との交流レクリエーションでは、中学生が率先してリードしている姿や温かい雰囲気の中、活動している様子がどのグループにも見られた。（現中学1年生が昨年度同じような活動を経験していることが大きな要因と考える。）さらに、11月の活動に対する児童の感想から「中学校生活や先輩達に馴染めるか」という不安感が「中学校生活への期待感や中学生に対する憧れ」に変化したことが読み取れた。中学生にとっても、相手の立場を考えながら関わりをもつことを意識する生徒が多く、進んで関わりをもとうとする場面が昨年度よりも多く見られた。部活動の部長を務める生徒による玄関前での見送りのときには、自然発生的に小学生が部長達にあいさつに行く姿も見られ、交流の成果を確認することができた。

〈あいさつ運動〉

実施期間中には、初日から積極的にあいさつをしようとする生徒の姿が多く見られ、事前の話合いの効果が伺えた。小学生も大きな声であいさつをする姿が各小学校で見られ、和やかで温かな雰囲気の中、あいさつの輪を広げることができた。また、実施期間終了後も、のぼり旗を利用し、あいさつに取り組む小学校もあった。

(2) 南魚沼市立塩沢小学校の取組

① 「全校一斉ソーシャルスキル教育」の実践

全校の合言葉「あたたかい 声のとびかう 楽しい塩小」を重点目標とし、その実現に向けて、取組を進めている。

「あたたかい声」に込めた目指す子どもの姿は、「①進んで挨拶」「②元気な返事」「③やさしい言葉、正しい言葉」「④明るい歌声」の4点である。適切に受け答えできることが、自発的な挨拶や歌声につながると考え、今年度は特に「返事」がしっかりできることに力を入れた。授業中に指名されたとき、表彰で名前を呼ばれたときなど、機会を捉えて、大きな声で「返事」することを意識させ、声が小さいときにはやり直して徹底させたことで、「元気な返事」ができる児童が増えてきている。また、生活目標と関わらせて、学期に2回ずつ、年間で計6回、あたたかいメッセージを伝え合う全校一斉ソーシャルスキル教育を実践した。4～5月は「挨拶」、6～7月は「不平不満の言い方」、9～10月は「励ます・気づかう」、11～12月は「仲間の入り方と誘い方」、1月は「やさしい頼み方」、2～3月は「ほめる・感謝する」をテーマとした。生活朝会で担当学年がスキルについての発表と呼びかけをし、各学級でもペアやグループで学び合うことで、心地よさを味わわせ、定着を図った。



② 小学校の取組の成果

温かい言葉がけや認め合いの活動を意図的、継続的に組み入れてきたことにより、Q-U検査の「学級生活満足群」の全校平均値が、1学期57%から、2学期62%に向上した。繰り返しスキルを学び合うことで、自己有用感が高まったものと考えられる。

(3) 南魚沼市立塩沢中学校の取組

① 「ほっとタイム」の充実

週1回の「ほっとタイム」（一週間の振り返りアンケート）を実施している。今年度は、質問数を一つ減らし、次の質問を設けた。そのねらいは、自分以外の周りの人に興味をもたせる、自分と関わりのある人の変化に気付かせる、の2点である。

- ・周囲の人（学級、学年、先輩、後輩）のよいところ、頑張っているところを紹介してください。
- ・また、あなたの周りに困っている人や悩んでいる人がいたら教えてください。どんなことでもよいので、自由に書いてください。

② いじめ根絶スクール集会

温かな、いじめを生まない居心地のよい雰囲気のある学校づくりを目指し、人間関係の構築

に大切なことへの生徒の気づきをねらいに、いじめ根絶スクール集会を行った。「今、自分にできること～温かな学校・集団づくりのために～」の主題のもと、生徒会総務が事前に全校生徒、全職員に心温まるエピソードについてのアンケート調査を行った。そして、その内容を集約し、劇で全校生徒に発信した。また、今後、どのような学校で過ごしたいか、どのような学校にしていきたいかをテーマに代表生徒がリレートーク形式で発表した。リレートークの発言では、今後のキーワードとなり得る「信じ合う」「温かな」「思いやり」などの発言が多くあった。



リレートークでの発言

③ 中学校の取組の成果

生徒の記述をまとめて教室に掲示した学級があり、学級担任からは自分以外の人に関心をもつ生徒が増えているとの感想があった。生徒の記述からも周囲の人の頑張りに目を向けるような記述が増えた。また、いじめ根絶スクール集会では、自分の周囲の友達や学校の良さに改めて気付いたり、リレートークの発言を前向きに捉えたりする記述が事後アンケートに多くあった。

5 課題

(1) 不登校児童生徒への継続した対応

成果にあげた関係機関との連携や本人・保護者への働き掛けが成果として表れているものの、依然として不登校児童生徒の人数は多い（特に中学校）。今後も関係機関や保護者等との連携を継続していくとともに、新しい年度に入ったらすぐに情報交換に入るなど、各小学校と中学校間で情報交換や連携にも、更に注力していく必要がある。具体的には、小学校職員は中学校に進学した生徒の様子を、中学校職員は中学校に進学する前の児童の様子を今以上に知る機会を設けたり、中学校に進学した生徒に必要な社会性について、より具体的なイメージをもつことができるような中学校区の職員間共通理解を図ったりすることが必要である。また、不登校生徒が関係する職員や関わりのもてる生徒との関係性を高めていくためのアプローチも必要となってくる。

(2) 他者との関わり方の未熟さ

7校の小学校から中学校に入学してくるために、他の人との関わり方や社会性の面で学校差がある。学校行事や塩沢中学校区「深めよう絆」集会などでは、生徒が主体的にリーダーシップを発揮したり、生徒同士が連携を図ったりしながら活動できており、成果が見られる。一方、その経験が普段の学校生活と結び付かない生徒もいる。些細な言動、感情の行き違いなどからトラブルに発展するケースも多く、他者との適切な距離感や関わり方を身に付けられるよう、今後も継続的に指導に努める必要がある。これは、小学校、中学校での共通する課題であるが、小学校側としては中学校へ送り出すための準備、中学校側は受け入れるための準備の段階から校種を超え共通認識のもとで指導にあたるとともに、児童生徒が主体的に活動できるような更なる取組も検討していく。

平成 30 年度 いじめ・不登校等対応実践研究のまとめ

～出雲崎町立出雲崎中学校区の実践～ （出雲崎小学校、出雲崎中学校）

1 実践研究のテーマ

○いじめ・不登校の未然防止に向けた児童生徒の社会性の育成

2 児童生徒に育てたい社会性

○積極的に他者と関わり、よりよい人間関係を形成するコミュニケーション能力を育成する。

○集団の中で他者と関わり、互いのよさを認め合うことで自己肯定感、自己有用感を高める。

○相手の立場や集団全体を考えた規律ある行動への意識を高めることで、基本的な生活習慣の向上や規範意識の醸成を図る。

3 実践内容

(1) 小中合同挨拶運動

年 2 回（6 月、9 月）に小学校児童会役員、中学校生徒会役員で挨拶運動を行う。

(2) 中学生と小学 6 年生によるいじめ見逃しゼロスクール集会

事前に道徳的価値のある資料による道徳授業を行う。当日は児童生徒がもった意見を基に小グループを編成し、話し合い活動を行う。

(3) 自己有用感と人間関係形成能力の育成を目指した縦割り班活動・・・(小学校)

(4) 全校話し合い活動・・・(中学校)

毎週水曜日、全校生徒をランダムにペアや小グループに編成し、話し合い活動や交流活動を行う。

(5) 専門機関との連携による講演会の実施

1、2 学期末に SNS 利用について等の生徒指導に関する講演会と人権意識を高める講演会を実施する。

4 実践例

(1) 小中合同挨拶運動・・・(小・中学校)

6 月と 9 月の年 2 回、合計 4 日間、小学校児童代表と中学校生徒会本部役員、1 学年委員合同で挨拶運動を行った。中学生が出身小学校へ出向き、中学生と小学生がさわやかな朝の挨拶を交わした。中学生が自分から笑顔で挨拶を行うことで、小学生も次第に笑顔で元気な挨拶ができるようになってきた。中学生も、1 年生は、最初は少し照れていた様子がみられたが、先



【小学校児童玄関前での挨拶】

輩と一緒に挨拶を行ううちにだんだんと元気よく挨拶をすることができるようになった。

保護者に向けても事前に「あいさつ運動への協力をお願い」のプリントを配付し、学校と家庭、地域が一体となって、児童生徒の社会性を培うことができるように工夫した。これにより児童生徒は、登下校中に出会った地域住民に対して進んで挨拶ができるようになった。

(2) 中学生と小学 6 年生によるいじめ見逃しゼロスクール集会・・・(小・中学校)

12 月に、小学校 6 年生を招いていじめ見逃しゼロに向けた討論会を実施した。事前によりよい人間関係の在り方や学校生活で起こりうる問題を題材にした道徳授業を、小中両方で実施し

た。当日の集会では、どのように行動すればいじめを防ぐことができるかということについて、中学生と小学校6年生が、自分の意見を発言したり、小グループを編成し、話し合い活動を行ったりした。活発に議論がなされ、参加者全員がいじめ防止について考えを深めることができた。活動後は、小中それぞれで、各自が「人の気持ちを考えた発言と行動をする」「自分から行動する」「陰口や悪口を言わない」等、いじめ見逃しゼロ宣言文を記入した。

生徒の感想には「いじめは、ちょっとした人の感情から生まれる身近なものであり、当たり前起こりうるものなんだと改めて分かり、とても怖いなと思いました。自分の意見をたくさん言うことで、すごく考えが深まって、とても良い集会だったなと思いました。」等の内容がみられた。児童の感想にも「いじめの怖さを改めて感じた。なぜいじめになってしまうのか、周りは何をすればよかったのか、そしていじめをなくすにはどうすればいいのかをこの集会で学んだ。」等の内容がみられた。

また、この集会では、中学生の姿勢が小学生にも良い影響を与えた。小学生が会場に入ってきた時に笑顔で出迎えたり優しく声を掛けたりして、小学生に安心感を与えた。グループでの話し合いの際には、小学生にも話をふったり言葉がなかなか出ないときはじっと待ったりするなど、話しやすい雰囲気をつくることができた。中学校入学への小学生の不安を和らげることにつながったと思われる。一方中学生も、小学校6年生の発言の多さに驚いていた。生徒の感想の中には、「来年は、僕たちが3年生になってみんなをひっぱっていくので、来年の集会ではしっかりと発言したいです。」や「先輩方が積極的に発言し、とても良い雰囲気の集会にしてくれたので、来年は自分がそのようになりたいと思いました。」等の内容も見られ、この活動においても、小学生との触れ合いを通して、中学生が成長する姿を確認することができた。



【いじめ見逃しゼロスクール集会 当日の様子】

(3) 自己有用感と人間関係形成能力の育成を目指した縦割り班活動の取組・・・(小学校)

固定化しがちなクラスの人間関係の枠を広げ、全校での縦割り班活動の場を多く設定し、人間関係形成能力の育成を目指した。また、多様な集団活動を通して、他学年への親切・思いやりの醸成を試みた。

① ふた葉班オリエンテーリング(5月1日)

ほなみが丘(学校の裏山)や校庭全体を使ってオリエンテーリングを行った。縦割り班ごとにポイントを探し異学年交流を深めた。1年生にとっては、初めて上学年と行うレクリエーションであり、他学年とふれ合う楽しさを味わうことができた。他の学年の児童も、新しい班のメンバーとチェックポイントでのクイズに答えたり、道順の相談をしたりするなど、交流を深める姿が見られた。



【ふた葉班オリエンテーリング】

② 縦割り班遠足（10月3日）

上学年のリーダーシップと下学年のフォロワーシップの育成、活動を通しての自己有用感や他者理解の向上を目指して実施した。上学年が、下学年と手を繋いで歩くスピードを加減したり、荷物を持ってあげたりするなど、下学年児童に対して思いやりの気持ちを発揮する姿が多く見られた。到着地の公園では、6年生がリードして班遊びを行った。鬼ごっこ、ドッジボール、遊具遊びなどを楽しみ、関わることで、班員同士の親睦やコミュニケーション能力の向上を図ることができた。

遠足後には、振り返りカードを書き、班員同士のよさや頑張りを認め合うことができた。



【縦割り班で「だるまさんが転んだ！」】



【遠足後の振り返りカード】

③ 「花いっぱい あいさついっぱい活動」

自作のあいさつ標語付きプランター作りを通して、協力して取り組む力を育んだり挨拶への意識を高めたりすることを目指した。また、作製したプランターを地域に貸し出すことで、地域の挨拶活動を盛り上げようと試みた。

具体的にはペア学年で花の苗を植え、学年間の教え合いを促した。6年生のリーダーシップのもと、土入れからプランターの移動までの作業を班のメンバーで話し合い、協力して活動することができた。

その後、プランターを町役場・JA・銀行・公民館・中学校などに貸し出し、目立つところに設置してもらった。貸し出し先からは、「花があることで気持ちが和んだ。」「利用者も大変喜んでいた。」と御礼の言葉をいただいた。そのことにより、児童も「自分達の活動を喜んでもらった。」と実感でき、自己有用感の高まりにつながった。



【協力して花の苗植え】



【町役場前の日々草】

(4) 全校話し合い活動・・・(中学校)

毎週水曜日、異年齢集団による交流活動として、全校生徒による話し合い活動を行っている。全校生徒をランダムにペアや小グループに編成し、学級・全校に「温かい人間関係」を構築できるように、話し合いのスキルアップだけでなく、人間関係づくりの機会としている。テーマに沿ってペアでの話し合い活動や、グループで協力して取り組むゲーム的な活動などを行っている。

活動の際は、教職員が全体のコーディネーター的な役割を果たしているが、実際の話し合いの場面では、上級生が活動をリードしている。活動後の振り返りでは、「3年生の先輩がいろいろと質問してくれたので、たくさん話すことができた。」など、上級生に対して下級生が感謝の気持ちを表現する記述も見られた。活動のポイントとして、この振り返りを大切にしている。活動ありきとせず振り返りを行うことで、「人と関わることって楽しい」「次の活動でも進んで協力したい」等の気持ちを自覚できるようにしている。振り返りでは、相手がきちんと話を聞いてくれず残念だった、というような感想も見られるが、こうした内容も生徒に返すことで、コミュニケーション能力の土台が形づくられると考える。

2学期最後の活動では学年ごとに円陣になり、お互いに「Happy・Thank you・Nice」のフレーズで、感謝のメッセージを伝え合った。活動後の振り返りには、「友達が自分に向けてメッセージを言ってくれた時、普段、何気なくやっていたことだったので、これからも続けようと思いました。」等の記述も見られた。生徒同士の目線で、他者からの評価をもとに自分の行動を振り返ることは、自己有用感の育成、さらには自己肯定感の獲得につながると考える。



【ペアでの活動場面】



【グループでの活動場面】

5 成果と課題

(1) 小学校

縦割り班活動を中心にした異学年交流の場を多く設定したことで、上学年のリーダーシップが発揮され、上学年が下学年に声を掛けたり、一緒に遊んだりする姿が多く見られるようになった。人間関係形成能力の育成や親切・思いやりの心の醸成が図られた。

2学期末の児童アンケートの肯定的評価を見ると、「友達のよいところを見つけて、ほめたり、はげましたりしていますか。」は89.7%であった。(1学期末86.5%) 縦割り班活動の後の振り返りカードのやりとりの成果と考えられる。「自分から進んで挨拶をしていますか。」は87.3% (1学期末85.1%) であった。児童の挨拶への意識は高まってきている。

課題は、親しさからくる馴れ合いや不用意な言葉で友達を傷つけてしまうことである。また、挨拶では、玄関先では、元気な挨拶ができて、教室や廊下での挨拶、地域での挨拶はもう一歩である。学年を問わず、友達とのよりよい関わりや「いつでも、どこでも、誰とでも」挨拶

ができるように、今後も指導していく必要がある。

(2) 中学校

10月に実施したhyper-QUの結果によると、

「係の仕事をする時、意見を言っている」・・・肯定的評価割合は84%（5月時は81%）

集団での活動の際に、自分から働きかけができたと考える生徒が増えてきており、これは、全校話し合い活動を通して、コミュニケーション能力が上がっている成果と考えられる。また、人の話を聞く時に、相手が何を言いたいのか考えながら話を聞くことができている生徒も増えてきている。

課題としては、10月に実施したhyper-QUや2学期末の生徒アンケートによると、「進んで協力できた」「誰かの役に立つことができた」という部分において、肯定的な評価割合が50～70%にとどまっていることである。また、数値による評価では肯定的に捉えていても、文章で記述することがなかなかできない生徒も多い。集団の一員としての自信や誇りの獲得が課題と言える。

2学期末に保護者アンケートをとったところ、それぞれの家庭で工夫を凝らしながら親子の対話に力を入れていることが分かった。生徒の挨拶において、「自分から」という姿勢がまだ弱い、家庭や地域と連携しながら、基本的な生活習慣の向上や規範意識の醸成をこれからも図っていきたい。

平成 30 年度 いじめ・不登校等対応実践研究のまとめ

～村上市立村上第一中学校区の実践～

(村上第一中学校、村上南小学校、瀬波小学校、上海府小学校)

1 実践研究のテーマ

不登校の未然防止に向けた児童・生徒の社会性育成、及び不登校解消に向けた取組

2 児童生徒に育てたい社会性

○他者との関わりを通して互いのよさを認め合い、自己有用感を高める。

○様々な交流の中で多くの人とつながることを通して、人間関係づくりの能力を高める。

3 実践内容

(1) 保護者と連携した生活習慣改善の取組

(2) 児童生徒の交流会の実施

(3) 地域と連携した交流活動の促進

4 実践例

(1) 保護者と連携した生活習慣改善の取組

家庭学習強調週間の取組を紹介するたより

一中校区共通 家庭学習強調週間 ご協力ありがとうございました

11月1日～11月7日

村上第一中学校

★学習時間 (各学年平均)

	第1回	第2回	第3回
1年	107分	⇒ 134分	⇒ 144分
2年	160分	⇒ 155分	⇒ 159分
3年	214分	⇒ 221分	⇒ 222分

★メディアコントロール達成率 (2時間以内)

	第1回	第2回	第3回
1年	78%	⇒ 54%	⇒ 68%
2年	71%	⇒ 77%	⇒ 79%
3年	88%	⇒ 88%	⇒ 93%

村上第一中学校には年4回の定期テストがあります。テスト2週間前にテスト範囲を配付し、計画表を作成してテスト対策に励みます。上記の結果はその2週間の取組の結果です。各学年ともにテスト前は非常に良く学習に取り組んでいます。しかし、課題はテストのない日の家庭学習やメディア機器の使用になります。一中では、自主学習を課題に家庭学習に取り組んでいますが、まだまだ内容が十分ではありません。確実な学力を身に付けるためにはその日に学習した内容の復習と問題練習が必要不可欠です。小学校の頃から自主学習に取り組む習慣を身に付けてほしいと思います。また、メディア機器の使用時間の多さも大きな課題です。依存症などにならないように家庭ではルールを作った上で使用してほしいと思います。

村上南小学校

← 休日は、学習時間が少しか
→ てからの学習時間の確保



★子どもやお家の方

- 読書をしてメディア
- 声を掛け合ってガ

上海府小学校

★学習時間

12人全員で1つのカードに取り組みました。

平日は学年×10分ですが、休日は学習時間たっぷり浸る、植物や昆

中学校区学力向上部では、11月に1週間の「一中校区共通家庭学習強調週間」を設け、取組を行った。これは中学校の定期テスト期間に合わせて小学校でも家庭学習時間を集計すると同時に、メディアコントロール（1日2時間以内の使用にとどめる）達成率も集計し、たよりとして中学校区内全児童生徒家庭に配付したものである。強調週間前に文書で家庭に協力を依頼し、また、期間中は毎日記録用紙を提出させ、点検・指導することで状況の改善を促した。

小学校では読書に興味をもった家庭や、親子で協力して目標を達成したという肯定的な声が聞かれた。中学校では学習時間、メディアコントロール達成率を定期テストの度に集計しているが、これまでで最もよい結果が得られた。目標達成に向けた努力を保護者や教職員に認められるという経験を通して、自己有用感の向上につながっていると考える。また、自己コントロールをする経験が、他者との関係づくりにおいて、わがままを抑え、相手と折り合いをつけることにつながっていくことを期待している。

(2) 児童生徒の交流会の実施

○ほっとコミュニケーション集会<いじめ見逃しゼロスクール集会>・部活動体験（11/30）



例年どおりの活動となったが、集会中、各校が校歌を歌う機会を設けた。保護者や地域を含めた500人ほどの参観者の中、わずか5人で参加した上海府小の児童が素晴らしい歌声を響かせ、万雷の拍手を浴びた。今年度で閉校する同校としては、アイデンティティを示すことのできるよい機会であったと参加職員も喜んでいた。

「いじめを見逃さないために」というテーマで、中学校生徒会で寸劇を行い、一人一人の行動のポイントについての理解を深めた。

合間に小集団で話し合う場面を設け、いじめを防ぐことができたタイミングとアプローチの仕方をグループ内で紹介し合った。具体的な例が示され、今後活かせるとの声が多くの子供生徒から挙がった。いじめを防ぐための声かけの仕方などを、具体的に考える機会となり、円滑な人間関係づくりの能力の育成につながっている。

(3) 地域と連携した交流活動の促進

① 総踊り「05神楽」を通じた対外的な活動（中学校・地域）

本校では7年前から「05神楽」という踊りを全校で踊っている。元々は体育祭での一体感醸成のために導入したものであるが、東日本大震災で被災した、村上市とゆかりのある福島県広野町を慰問した際に披露して以来、毎年全校で踊りを練習し、いくつかの場で披露している。今年度は以下のように活動した。

ア 生徒有志による、にいがた総踊り、その他校外2カ所での発表

全校から30名ほどが参加した。にいがた総踊りでは、自校の踊りを披露することに加え、他の参加中学校生徒とも交流し、親睦を深めた。その他、校外での発表のうち1カ所は市内のショッピングセンター、もう1カ所は福島県広野町での披露である。どちらも一般の観客が楽しみにしており、今年も多くの方々から喜ばれ、賞賛をいただ



いた。これも大切な自己有用感の育成の場面である。

イ 体育祭の応援の部の必須演目への設定、全校での練習、体育祭当日の発表



体育祭での演目披露

7月中旬に全校体育の時間として外部講師を招いて練習を行った。外部講師からの指導を踏まえ、以降は3年生をリーダーとして練習を重ね、体育祭当日には各軍団、全校で披露した。練習を重ねる中で教え教わるなど人と関わる力が高まり、当日の披露で観覧者から盛大な拍手を浴びていた。

これらの総踊りの活動を通して、一体感や躍動感はもちろん、一生懸命に踊ることで見ている人を感動させる、喜ばせることができる、と生徒達は感じ取ることができ、自己有用感の向上につながったと考える。

また、総踊りを通じて他校生徒、地域の方々、被災地の方々、保護者とつながることで、人間関係づくりの能力も高まったと考える。

② 地域と連携した交流活動の促進（小学校・地域）

村上南小学校には、児童の父親や地域の元保護者が中心となって活動を行う「おやじの会」というPTA組織がある。学校と「おやじの会」が協力しながら、保護者と児童、そして、他校児童との交流活動に積極的に取り組んでいる。

今年度は、村上小学校児童との交流活動を2回実施した。夏には、観光客のためのベンチ作りを親子で行い、その後、水鉄砲大会で楽しんだ。冬にはジャンボかるたを制作し、それを使って遊んだり、ちゃんこ鍋を食べたりし、親と子、そして他校児童との交流を図った。

他校児童と活動する中で、児童はお互いのよさや頑張りを伝え合う姿が見られた。自己有用感および人間関係づくりの能力の向上につながっていると考える。



夏の交流活動



5 成果と課題

(1) 成果

- 保護者と連携した生活習慣改善の取組により、実態が把握でき、児童生徒の生活習慣の改善につながった。継続調査をしている中学校では、学習時間が増加し（第1回160分→第3回175分）、メディアコントロール達成率が上昇した（第1回79%→第3回80%）。
- 中学校の総踊りの活動、小学校のPTA組織との活動では、多くの人たちと関わる中で互いのよさを認め合うことができ、自己有用感及び人間関係づくりの能力の向上につながっていると考える。
- 中学校の学校評価におけるアンケート結果について、「学校生活の中で充実感や満足感を感じることはありませんか。」の項目に肯定的回答をした生徒は、1学期90%→2学期92%と上昇した。また、小学校の学校評価におけるアンケート結果について、「あなたは、自分にはよいところがあると思いますか。」の項目に肯定的回答をした児童は1学期83%→2学期86%と上昇した。これらの結果から、社会性育成の取組を通じて、自己有用感が高まっていると考える。

(2) 課題

- 当中学校区における不登校生徒の数に大きな変化はない。家庭における基本的な生活習慣

の乱れ、対人不安や学習不安を訴えて不登校になるケースが多く、改善は道半ばである。魅力ある学校づくりをベースに児童生徒の人間関係スキルの獲得・向上を目指した活動を一層推進していくと共に、睡眠時間の適正化を核とした睡眠教育を導入し、生活リズムの改善を図っていく。また、校内適応指導学級、通級指導教室の活用、市適応指導教室との効果的な連携など、様々な学びの場、学びの形を提示し、生徒や家族のニーズに応じた支援に努めていきたい。

平成 30 年度 いじめ・不登校等対応実践研究のまとめ

～佐渡市立両津中学校区の実践～

(両津小学校、河崎小学校、両津吉井小学校、加茂小学校、両津中学校)

1 実践研究のテーマ

- 自己有用感を育む集団づくり
- 思いやりのある人間関係の構築

2 児童生徒に育てたい社会性

- 交流活動の充実を図り、相互理解を深め、自己肯定感・自己有用感を高める。
- 小中連携の取組を通じて、適切なコミュニケーション能力の形成を図る。

3 実践内容

(1) 中学校区児童生徒社会性育成交渉活動の取組

- ① 中学校区の児童生徒全員による「いじめ防止標語づくり」(8月～9月)
 - ・小学6年生を中学校に招き、「標語グランプリ選考会」・「部活動体験」の実施(9月)
- ② 両津中学校生徒会の企画による「いじめ見逃しゼロ全員集会」の実施(11月)
 - ・小学6年生を中学校に招き、縦割り班での話し合い活動と意見の共有

(2) 小中合同「あいさつ運動」(各学期一回)

- ・小学生が、中学校に出向いて合同活動を実施(社会性育成連携校間での取組)
- ・中学生が、小学校に出向いての合同活動の実施(中学校区内、連携校以外の取組)

(3) 部活動デモンストレーション(7月)

- ・昼休みに、中学生が小学校を訪問し交流活動を実施(社会性育成連携校間での取組)

(4) 地域教育懇談会(6月～7月)

- ・PTA主催で、保護者・地区担当民生委員・学校職員が学区小学校単位で懇談会を実施

4 実践例

(1) いじめ見逃しゼロ全員集会(両津中学校区小中学校)

① 1st ステージ「中学校区児童生徒交流活動」(9/18)

いじめ防止標語を中学校区の児童生徒から募集し、中学校に中学校区4小学校の6年生を招き、小中縦割り班で「標語グランプリ選考会」を行った。

縦割り班で活動することにより、中学生は、小学生が安心して活動に参加できるように配慮し、小学生は臆せず自分の考えを伝える姿があった。お互いの意見を尊重しながら、考えを構築する機会となっていた。

また、「選考会」後に部活動体験を行い、小学生が希望した部活動に参加し、中学生が小学生に練習の仕方を教えたり、相手になったりしながら交流を深めた。練習後には、「一緒に練習できて楽しかった」、「教え方が分かりやすかった」など、小中互いに感想を述べ合いながら、かかわり合えた喜びを表現していた。



② 2nd ステージ「いじめ見逃しゼロ全員集会」(11/27)

校区の4校の小学6年生を招き、両津中学校生徒会で企画した「いじめ見逃しゼロ全員集会」を行った。1st ステージで決定した「標語グランプリ」の表彰式を行い、大賞に選ばれた標語を懸垂幕にし各校に配付した。また、中学生がリーダーとなり、縦割り班で「いじめにつながる場面でどう行動したらよいか」の話合いを行った。



話合いでは、小学生からの「断る勇気が出せないかも…」の意見に、「皆そうだよ、だから皆で話し合う事って大事だよ」と中学生が言葉を添える姿があった。小学生の意見に対し、中学生が共感的に受け答えをしており、かかわり合い、支え合う姿が多く見られた。



さらに、本年度は、県の「いじめ見逃しゼロキャラバン」とタイアップして、県から派遣された専門の指導員によるアイスブレイクやSNSマナーの講話もあり、好評だった。異年齢間の活動や意見交換を通して、互いの立場に立って考え発言し、自分とは違う考えを尊重しながら最後まで聞ける態度を育てる機会となった。

～ 資料 ～

2nd ステージで話合いをした際に使用した、場面紹介イラスト(一部)

イラスト(当校職員制作)を活用することにより、中学生のリーダーが小学生に分かりやすく説明することができ、イメージが伝わり活発な話合いができた。



(2) 小中合同あいさつ運動

① 1学期(7月10日)

小中合同あいさつ運動では、3・4年生8人が中学校に行き、玄関前で中学生とあいさつをした。いつもと違う雰囲気の中、最初は緊張感が見られたが、代表の中学生の態度が良い手本となり、登校してくる中学生に元気にあいさつをすることができた。少人数で登校する中学生は、小学生からあいさつをされると笑顔であいさつを返す姿が見られた。



小学校では、あいさつ運動を奨励することで、朝のあいさつだけではなく、廊下で会ったときに「こんにちは。」と自然で気持ちの良いあいさつができるようになってきた。

② 2学期(11月9日)

2回目の小中合同あいさつ運動では、1・6年生8人が中学校に行き、玄関前で中学生とあいさつをした。今回は小学生同士でも、6年生が1年生の世話をする様子が見られた。また、中学生も1年生をかわいと感じ、肩に手を置くようなスキンシップをする姿が見られた。



最初はお互いに緊張した様子も見られたが、中学生にリードし

てもらいながらしっかりあいさつができた。小中学生がお互いに刺激し合いながら元気なあいさつ運動が展開され、生徒玄関前にさわやかな声が響いていた。

小学校では、縦割り班活動や地域ぐるみのオアシス運動（あいさつ運動）を継続しており、年上の人に対しても声をかけることに抵抗がなく、誰とでも臆することなく話せる児童が育ってきている。2月には、学校の近くにある佐渡市役所両津支所の玄関前で出勤時間帯にあいさつ運動を行った。大人が児童の明るい声に元気づけられ、笑顔になる様子が多く見られた。毎月3回（10日・20日・30日）、委員会が中心となり「オアシス運動」というあいさつを推進する取組でも、明るい元気なあいさつができるようになった。また、毎朝校門前で職員2名が児童をあいさつで迎えているが、低学年は、丁寧に頭を下げた礼をし、大きな声であいさつをする児童が増えた。高学年の中にはこちらからの声掛けに下を向き、あいさつに対して反応がない児童もいたが、この活動を継続することにより、声は小さいが視線を合わせてコミュニケーションをとろうと努力できるようになった。

(3) 男子バスケットボール部との交流（両津小）

社会性育成連携校である両津小学校と両津中学校では、7月にバスケットボールを通じた交流会を行った。両津中学校区はバスケットボールが盛んな地区であり、児童生徒にとってとても興味のあるスポーツである。今年度は、昨年度よりミニバス教室に入った児童が4人増え、1年生からも参加している。



そこで、小学生が中学生の高度な技を見ることで中学生へのあこがれの気持ちをもったり、バスケットボールに対しての意欲を高めたり、異学年交流を通してコミュニケーション能力の向上を図ったりすることも意図して設定した。また、思春期で悩みを抱えやすく、更に高校受検を控え精神的に不安定になりやすい中学3年生にとっても、自己有用感を高められる場となることを期待して企画した。



当日は、昼休みに中学3年生の男子バスケットボール部員7人が小学校を訪問した。小学生は興味のある50人程度が体育館に集まった。最初に中学生の上手なプレーを見せてもらい、素早いパスやロングシュートが決まるのを見て、小学生から大きな拍手が起きた。小学生の前で難しいパスやシュートなどの技を披露する姿は、自信に満ちており逞しさを感じさせるものであった。

後半は、パスやシュートの仕方を中学生から教えてもらったり、一緒にゲームをして楽しく遊んだりすることができた。中学生が、遠くに転がったボールを取ってきて小学生に渡す姿や、ゆっくり分かりやすくシュートの仕方を教える姿など、相手が小学生であることを意識して接している様子が見られた。終始穏やかで優しい表情が見られた中学生は、最後に全員で並んで撮った記念写真も笑顔であった。このような姿から、中学生は、自己有用感を高めることができたと思われる。また、小学生からは、「ダンクシュートがかっこよかった。」「体育でも使えるすごい技があって、勉強になった。」「中学生のようにうまくなりたい。」との感想が聞かれ、より高い目標をもたせることができた。

(4) 地域教育懇談会の開催（6月下旬～7月中旬）

社会性育成を図る上で、多くの人とかかわり合う経験は必要不可欠である。児童生徒が育つ基盤である、家庭や地域の連携を強化するために、学区内の小学校単位で、保護者・民生委員・

学校職員が子育てをテーマに話し合いを行った。

話し合いでは、学校生活での教職員とのかかわりや、家庭での様子について活発に意見が交わされた。また、民生委員の方から、普段の挨拶の様子や地域行事への参加の状況について情報提供していただき、意見交換をすることができた。

家庭の教育力を高めるためにも、地域のコミュニティーを活性化させる必要がある。地域ぐるみで児童生徒を育成することの重要性について確認する機会となった。全地域の懇談の記録を保護者・地域の方に配付し、地域の協力体制の充実を図った。

5 成果と課題

当中学校区は、人と意見を交わしたり、互いに協力したりする活動を苦手とする児童生徒の割合が多い。また、感情のコントロールが苦手な児童生徒も多い。このような児童生徒への指導支援の在り方について、中学校区共通の課題として、自己肯定感や自己有用感を高めることを目的に、社会性育成の取組を実践してきた。

成果としては、小学校では、活動中に1人での友だちに声をかける児童が増え、また、休み時間に異学年同士で遊ぶ姿が多くなった。その結果、大きなトラブルが減少し、学校全体が落ち着いてきた。また、中学生との交流機会が増えたことによって、中学生に対する「怖い」というイメージが解消され、中学校入学に期待を抱く児童が増えた。

中学校では、昨年度から「生徒との温かなかかわり」に指導方針を切り替え、対応してきた。生徒の言動やアンケートから、徐々に自己肯定感・自己有用感の高まりを確認できた。休み時間に生徒同士や職員と談笑したり、「勉強を教えてください。」と職員に相談を持ちかけたりする生徒が増えてきた。

児童生徒の困り感の根幹には、学習に対する不安がある。児童生徒の学習意欲や習熟度には、まだまだ個人差があり、大きな課題である。社会性育成の取組の継続により、心を開く児童生徒が増えており、「学びの土台（信頼と安心）」ができてきたと感じている。「信頼と安心」をベースに、全ての児童生徒が自信をもてる授業づくりを進めていきたい。

【アンケート結果】（肯定的評価）		前年度後半	今年度前半	今年度後半
生徒	仲間と話し合ったり一緒に作業したりしながら課題を解決できた	57%	83%	82%
	仲間の失敗に対し、相手の気持ちや立場を考えて、許したり励ましたりする	49%	89%	86%
保護者	学校運営に改善に努力し、子どもや保護者にとって信頼できる学校である	90%	97%	100%
	子どもは、挨拶や返事がきちんとでき、場に応じた言葉遣いができる	79%	87%	84%